【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	埼玉県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	岩槻市立新和小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	２	２	２	２	１４	２０
児童数	４１	５４	４１	４８	５５	６２	６	３０７	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自ら学び、わかる喜びを味わえる学習指導の工夫・改善
～児童一人一人の実態に応じた算数科指導～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

＊　実施学年及び教科を選択した理由を記すこと。
○全学年・算数
・児童の理解の状況に差が出やすい教科、学年であるため。
・具体的な取り組みや効果が保護者も含めて見えやすい教科である。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ　「基礎・基本の確実な定着を目指す学習指導の工夫・改善」 ～児童一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を中心として～ ○研究の見通し（仮説） 「習熟度別学習等、児童一人一人の実態に応じたきめ細かな指導をすれば、基礎・基本が確実に習得でき、確かな学力を身につけさせることができるであろう。」 ○研究の内容・方法 ＜内容＞４年生の算数を中心とした「個に応じた指導」の在り方 ＜方法＞習熟度別学習の導入→２学級を４つのコースに分ける １学級を３つのコースに分ける 教師用評価表や個人診断カルテ等の作成・活用 児童用ふりかえりカード等の活用

平成15年度	○テーマ　「自ら学び、わかる喜びを味わえる学習指導の工夫・改善」 ～児童一人一人の実態に応じた算数科指導～ （昨年度のテーマをふまえ、より具体化を図った。） ○研究の見通し（仮説） 「児童一人一人の実態を把握し、個に応じたきめ細かな指導をすれば、学習に意欲的に取り組み最後まで共に粘り強く考えながら、確かな学力を身に付けた子が育つであろう。」 （昨年度の仮説の具体化を図った。） ○研究の内容・方法 ＜内容＞・児童の実態に合わせた学習形態の研究 ・単元に合った学習形態の研究 （全学年・算数を中心とした「児童の実態や単元に合わせた学習形態等の研究…４年から全学年へと研究の範囲を広げた。）

・教材の開発　①児童の学習の楽しさを高める教材
②学習の興味関心を高める教材
③児童の学習理解を深める教材
④児童の学習理解の実態に合わせた教材
⑤学習内容の習熟を図る教材

＜方法＞（具体的な取り組みから）

（１）教師の共通理解及び資質の向上
①全学年・学級における授業研究会の実施
②授業展開のＨｏｗｔｏ化の研究推進

（２）学習形態の工夫
①Ｔ・Ｔ（一斉授業で２人の教師の指導）
②少人数指導（学級を均等に２つに分けて２人の教師の指導）
③学級内習熟度別指導（個人差が大きい学年で、同じ教室で席を習熟度別に分けて２人の教師で指導）
④習熟度別指導（レディネステストなどを参考に児童と保護者の希望でコースを選択する。教師がアドバイスすることもある。）

（３）個に応じた指導の工夫
①一人一人の児童を把握するためのレディネステストの活用
②教材教具の工夫（発展的・定着を図る・補助的・コース別の教材）
③計算問題（計算の仕方を工夫させる教材・考え方を身に付ける教材等）
④ヒントグッズ（スモールステップで児童に考えを促す教材）
⑤補助的な教材としての具体物・半具体物の準備）
⑥補助的な教材としてのヒントカードの準備
⑦コンピュータの活用・練り上げ方の工夫
⑧コース分けに伴う自己決定能力の育成

（４）児童の意欲を高める工夫
①問題提示の工夫　②具体的な操作活動　③体験的な活動
④くりかえし学習の工夫　⑤算数ゲーム　⑥ゲーム形式
⑦問題づくりの工夫

（５）評価の工夫
①観点別評価と支援を要する児童への対応策検討・計画作成
②授業中の様子を簡単に評価するカラーカード
③賞賛の工夫（教師の言葉かけ・シール・丸・合格印等）
④学習プリントやヒントカードの活用
⑤自己評価カードの活用（ふりかえりカード）
⑥児童のノートからの評価
※定着度を知るためのテストの実施

（６）学習環境の整備（全校統一で実施）
①授業の流れの教室掲示
②既習の確認ができる算数コーナーの設置（教室内外）
③授業後の児童一人一人の感想文コーナーづくり（高学年）
④算数グッズコーナーの活用（高学年）

（７）保護者・地域との連携
①情報提供（学校だより・学年だより・共育だより・シラバス）
②シラバスの作成・配布（＊単元の学習形態を表記　＊保護者が把握しやすいように工夫　＊児童にも読めるよう表記　＊学期始めに全保護者に配布）
③全体説明会（フロンティアスクールプランの説明）
④公開授業（学校参観・授業参観・懇談会等…授業のねらい、学習方法等についての説明）
⑤アンケートの実施（＊コース分けに伴う児童との相談面接　＊授業について…学習形態・児童の様子　＊学習環境について　＊結果の説明）
⑥学習支援ボランティアとの連携
⑦学校評議員会、学校総務会、ＰＴＡとの連携

平成16年度	○テーマ　「自ら学び、わかる喜びを味わえる学習指導の工夫・改善」 ～児童一人一人の実態に応じた算数科指導～ ○研究の見通し（仮説） 「児童一人一人の実態を把握し、個に応じたきめ細かな指導をすれば、学習に意欲的に取り組み最後まで共に粘り強く考えながら、確かな学力を

身に付けた子が育つであろう。」

○研究の内容・方法

＜内容＞・児童の実態に合わせた学習形態の研究

・単元に合った学習形態の研究

（全学年・算数を中心とした「児童の実態や単元に合わせた学習形態等の研究）

・教材の開発　①児童の学習の楽しさを高める教材

②学習の興味関心を高める教材

③児童の学習理解を深める教材

④児童の学習理解の実態に合わせた教材

⑤学習内容の習熟を図る教材

＜方法＞（具体的な取り組み）

◎基本的に平成１５年度の取り組みを継続し、そこからさらにより組織を生かした研究体制を組み、授業研究会等を通した学習形態・評価及び教材開発等の研究の推進を図る。

（１）教師の共通理解及び資質の向上

①継続的な授業研究会の実施

②授業展開のＨｏｗｔｏ化の研究推進

（２）学習形態の工夫

①Ｔ・Ｔ（一斉授業で２人の教師の指導）

②少人数指導（学級を均等に２つに分けて２人の教師の指導）

③学級内習熟度別指導（個人差が大きい学年で、同じ教室で席を習熟度別に分けて２人の教師で指導）

④習熟度別指導（レディネステストなどを参考に児童と保護者の希望でコースを選択する。教師がアドバイスすることもある。）

（３）個に応じた指導の工夫

①一人一人の児童を把握するためのレディネステストの活用

②教材教具の工夫（発展的・定着を図る・補助的・コース別の教材）

③計算問題（計算の仕方を工夫させる教材・考え方を身に付ける教材等）

④ヒントグッズ（スモールステップで児童に考えを促す教材）

⑤補助的な教材としての具体物・半具体物の準備）

⑥補助的な教材としてのヒントカードの準備

⑦コンピュータの活用・練り上げ方の工夫

⑧コース分けに伴う自己決定能力の育成

（４）児童の意欲を高める工夫

①問題提示の工夫　②具体的な操作活動　③体験的な活動

④くりかえし学習の工夫　⑤算数ゲーム　⑥ゲーム形式

⑦問題づくりの工夫

（５）評価の工夫

①観点別評価と支援を要する児童への対応策検討・計画作成

②授業中の様子を簡単に評価するカラーカード

③賞賛の工夫（教師の言葉かけ・シール・丸・合格印等）

④学習プリントやヒントカードの活用

⑤自己評価カードの活用（ふりかえりカード）

⑥児童のノートからの評価

※定着度を知るためのテストの実施

⑦評価規（基）準計画表の作成（算数）

（６）学習環境の整備（全校統一で実施）

①授業の流れの教室掲示

②既習の確認ができる算数コーナーの設置（教室内外）

③授業後の児童一人一人の感想文コーナーづくり（高学年）

④算数グッズコーナーの活用（高学年）

（７）保護者・地域との連携

①情報提供（学校だより・学年だより・共育だより・シラバス）

②シラバスの見直し（より児童の実態に合ったものに）

③全体説明会（フロンティアスクールプランの説明）

④公開授業（学校参観・授業参観・懇談会等…授業のねらい、学習方法等についての説明）

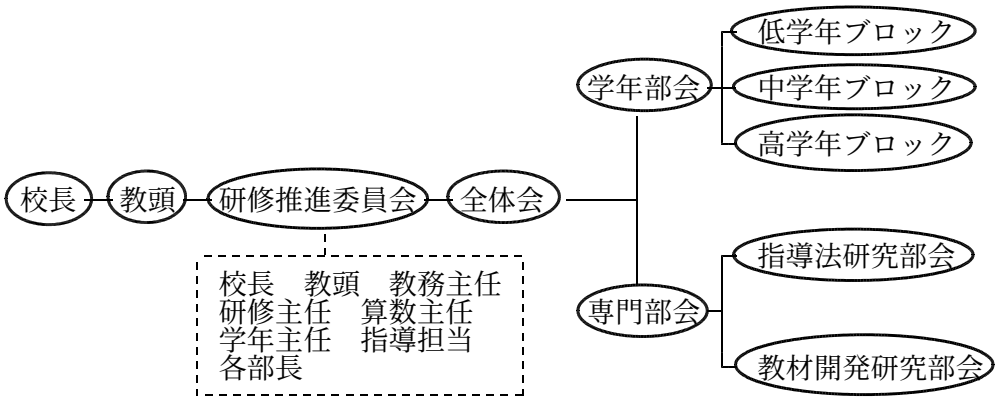
⑤アンケートの実施（＊コース分けに伴う児童との相談面接　＊授業について…学習形態・児童の様子　＊学習環境について　＊結果の説明）

⑥学習支援ボランティアとの連携

	⑦学校評議員会、学校総務会、ＰＴＡとの連携

＊　平成１５年度からの新規校については、平成１５、１６年度の計画について記入すること。

(3)　研究推進体制



＜研究推進委員会＞・研究推進にかかわる企画・立案・研究
・各研究部との連絡調整
・必要に応じて推進委員を中心としたプロジェクトチームの編成
＜指導法研究部会＞・指導方法・指導体制等の研究開発
＜教材開発研究部会＞・教材の研究開発
＜ブロック研究部会＞・指導法や教材開発等にかかわる一体的な研究開発

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

・学習形態を考えたシラバスを作成したことにより、単元に適した学習形態が見えてきた。
・学習形態は児童の実態と大きく関わることがわかってきた。
（①児童数　②児童の学力の個人差　③基本的な生活習慣の個人差　④基本的な学習習慣の個人差等）
・学習形態は、単元の特徴と児童の実態が複雑に交錯しているため、一概に結論づけられない。
・学習形態を選択した授業を行っての効果は、教師の事前の十分な教材研究に関わるところが大きい。
・ＴＴは幅広い考えを取り上げて練り上げる時に効果的である。均等の少人数もいろいろな考えの児童の集団なので練り上げができるが、前者の場合ほど幅広い発言がでてこない場合もある。
・授業の前に児童の実態に合わせた教材を準備するが、教科書にそったものが効果的である場合と新たに考えた場合が効果的な場合とがある。
・学力の個人差が大きい場合は、どんなに少人数でも一人一人もしくは数人に対応した教材の準備が必要になることがわかった。人数ではなく、一人一人の実態把握を行い、そこから教材を作成してきた。
・問題を解くための教具は、低学年だと「おはじき」や「ブロック」が算数セットにあるので、それを使って考えることが多い。１年生の１学期には無理であろうが、教材教具をいつも教師が用意したり、「これで解きましょう。」と指定せず、「自分で工夫して考えてごらん。」と問いかけることも必要ではないか。教師がいつも準備を整えることは丁寧だし必要なことだが、意図的に児童に準備させることも必要であると考える。勿論、その際児童の考える手だてとなるグッズが児童の身近に準備されていることが必要不可欠である。
・日々の評価は絶えず児童の指導に生かす為に必要である。教師側の評価の手だてとして、　①座席表を活用した評価　②児童の一覧表を活用した評価　③色紙の切れ端（カラーカード）を利用した評価　④児童のノートに直接の評価（授業中の机間指導）　⑤学習プリントの評価　等を行ってきた。児童は、　①毎時間の自己評価　②単元が終わっての評価　を行った。

・算数的体験活動により、児童が具体的に数の仕組みや概念が理解できる効果があるとわかってきた。

２．今後の課題

・シラバスは、毎年の児童の実態に合わせ、修正していくこと。
・習熟度別学習は児童の学力の個人差が開いている単元や各学年の重点と考える単元で行ってきたが、今後は他の単元でも実践が可能かどうか探っていくこと。
・今後とも、学習形態の特徴について研究を深め、それを十分理解し踏まえた上で授業実践に取り組んでいくこと。
・評価については毎日のことなので、簡単に・効果的に・きめ細かな指導に生かすための記入の仕方の工夫や方法の見直しの研究を、今後とも行っていくこと。
・評価規準の見直しを行い、指導に生かしていくこと。
・算数的体験活動の推進を更に推進すること。
・今後も授業公開日等により保護者の一層の理解を得るとともに、ニーズに応え、それぞれの立場から共通の目的に向かい、連携を強めていくこと。
・授業の準備や教材作成等のための時間の確保に努めること。
・児童に学力の個人差がある場合に生かせる補充的な教材の開発を行うこと。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

・定期的な学力検査の実施（年１回・１月実施）
・各単元におけるレディネステストや力試しテスト・形成的なテスト・総括テスト等
・個人診断カルテの作成

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・埼玉県東部地区学力向上推進協議会「授業研究会」の開催
　＊平成１６年1月２７日（火）１３：３０～　於：岩槻市立新和小学校
　　（対象…東部地区管内参加対象校、その他県内外参加希望校）
・「授業研究会」報告会
　＊平成１６年2月２０日（金）１６：００～　於：岩槻市立新和小学校
　　（対象…新和小学校保護者）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☒１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　☒１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☒少人数指導　☒Ｔ．Ｔによる指導　□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☒算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☒有　□無